

〔課題演習抄録〕

タッチングを取り入れた関わり合う保健体育科指導法の研究

宮 城 佑 里 乃

Yurino MIYAGI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：タッチング，ノンバーバルコミュニケーション，関わり合い，協働的な学習

1 研究の目的

中央教育審議会（2016）は、平成20年改訂の学習指導要領（保健体育）の成果として、健康・安全に関する基礎的な内容やスポーツとの多様な関わり等の必要性等の内容が身に付いていることを挙げている。一方、運動する生徒とそうでない生徒の二極化は依然として深刻で、習得した知識・技能を生徒自身の健康課題の解決に活用できていないことが課題として挙げている。その課題を踏まえ、保健体育科の学習では、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動が求められている（文科省、2017）。

筆者は、主体的・協働的な学習活動が運動する生徒とそうでない生徒が混在する中でより効果的に行われる方法として、精神的苦痛の軽減や相手の気持ちを受け止める等の様々な効果があるタッチングの活用が有効ではないかと考えた。

本研究は、主体的・協働的な学習をより効果的に促す方法として、タッチングを取り入れた保健体育科指導法について検討することを目的とする。

2 研究の計画

実習校においてタッチングを取り入れた体育授業の実践研究を行い、学習カードの記述や授業評価アンケートから単元前後の生徒の運動に対する価値観や意識の変化を調査した。

(1) 研究対象と授業内容

- ・ 予備実践（平成28年12月）  
対象：第1学年 女子68名  
単元：球技「ネット型（バレーボール）」
- ・ 本実践（平成29年10月～12月）  
対象：第3学年 女子47名

単元：球技「ベースボール型（ソフトボール）」  
陸上「長距離走」

\* 本実践は、二つの単元を通して調査を行った。

3 研究の内容

(1) タッチングについて

タッチングとは、ノンバーバルコミュニケーションの一つであり、身体的な接触によるコミュニケーションの方法である。

身体的な接触を行うタッチングは、人間の健全な成長にとって重要であることは古くから幾度となく指摘されている（モンタギュー、1977）。タッチングによって、身体に触れると皮膚に分布している感覚受容器に刺激が伝わり、情動や自律神経系、免疫系、内分泌系に影響を与える。これがタッチングの効果といわれる精神的・身体的苦痛の軽減に繋がっている（高橋ら、2010）。

その効果に注目し、教育現場においても主に養護教諭の視点からタッチングの必要性が述べられている。會田らの研究（2014）では、「養護教諭がスキンシップ・タッチを行った後に、児童生徒の表情が笑顔になり、自ら訴え、話をする児童生徒が見られた」という結果を報告し、「心身ともに安心して自分の気持ちを表出できるのであれば、スキンシップ・タッチは教育的な意味を成すと考えられる」と述べている。さらに、生徒相互においても、スキンシップ・タッチによって相手を受け止める、受け入れるといった思いやりの効果が育まれることを期待し、スキンシップの示す教育的効果は大きいといえるのではないかと述べている。

(2) 予備実践（バレーボール）

予備実践では、授業の導入やペア・グループ学習の際にタッチングを取り入れ、タッチングをすることについて生徒がどのように感じるかを学習カードの記述より考察した。

学習カードの記述より、「タッチングをされて嬉しかった」、「タッチングをすることで楽しくできた」等のタッチングに対する肯定的な記述が見られ、タッチングをすることによって生徒同士の言葉かけが促されている様子も見られた。生徒は、生徒同士でタッチングをすることに対し、好意的に捉えていると考えられる。

一方で、全体の5%と少数ではあるが「練習してもアンダーハンドができなかった」や「他のグループと差があって楽しくない」等の記述があり、仲間との協働が技能の向上と結びついていないという課題が明らかとなった。また、嬉しさや喜びを共有する場面においてはタッチングが多く見られたが、タッチングの効果が最も有効となる仲間の失敗やミスを励ます場面においては、タッチングはあまり見られなかったという点も課題である。(3)本実践(ソフトボール、長距離走)

本実践も予備実践と同様に導入やペア・グループ学習の際にタッチングを取り入れた。また、予備実践の課題を踏まえ、取り入れるタッチングの方法を①喜ぶ場面②仲間を励ます場面に分けて提示し、特に②への意識を促すために②のタッチングの方法は各学級で考案させた。各学級で考案した方法は、「肩ぼんぼん」「背中をさする」等であった。また、長距離走の学習では、苦手意識や不安感を軽減するため、授業前に学級全員で行う円陣を取り入れた。

調査方法は、実践前後に実施したアンケートによって、生徒の運動に対する意識や価値観の変化を調査した。主なアンケート項目は、⑦タッチングをする際にどのような気持ちになるか⑧仲間と協働して学習することができたか⑨運動への多様な関わりの視点(する・見る・支える)から楽しさを味わうことができたかの3項目である。

調査の結果は、⑦の項目では、「楽しい、嬉しい、元気が出る」という回答がそれぞれ約80%と最も多く、次いで「安心する」が49%とタッチングの効果が有効に作用したと考えられる。一方、「不安、苦手」と回答した生徒が4%存在した。要因としては、学級全員等の多くの人数で行うハイタッチや円陣を取り入れたことが考えられる。ペアや少人数で行う場合と違い、人数が増えることによってタッチングの効果が得られにくくなったと考える。

⑧の項目では、仲間を励ましたり、応援したりすることができる回答した生徒が増加し、タッチングによって生徒相互の関わり合いを促すことができた。しかし、仲間にアドバイスをしたり、わからないことを聞いたりすることができる

した生徒は減少し、関わり合いの内容が仲間を励ましたり応援したりすることばかりに意識が向いてしまい、学習の内容を深める関わり合いができていないことが明らかとなった。

⑨の項目では、「する・見る・支える」の3つの運動の関わり方から調査したが、それぞれにおいて楽しさを味わうことができたと回答した生徒が増加していた。また、実践後は、運動能力・運動経験にかかわらず、全ての生徒が「する・見る・支える」のどちらかで運動の楽しさを味わうことができたと回答しており、自己に合った運動の楽しさをを見つけることができていた。

#### 4 成果と課題

研究の成果は、タッチングを取り入れることにより生徒相互の関わり合いを促すことができたことや全ての生徒が自己に合った運動の楽しさを味わうことができたことが挙げられる。このような成果から、体育授業においてタッチングを取り入れることは有効な方法であると考えられる。

一方で、課題は、取り入れるタッチングの方法や人数によっては効果が得られにくかったことや、タッチングによって促された関わり合いが学習の内容と結びついていなかったことが挙げられる。タッチングの効果が有効に作用するために、生徒の緊張・不安が高まる場面と協働的な学習を促す場面に分けて、各場面に合わせたタッチングの方法や人数を検討する必要がある。また、タッチングをする際にアドバイスを伝える等、タッチングの際に学習の内容についての言葉かけができるとよりよい協働的な学習を促すことができるのではないかと考える。

今後も生徒相互の関わり合いに着目して、さらに研究を進めていきたい。

#### 主な引用・参考文献

- 會田樹梨他 2014 養護教諭の対応と子どもの安心感との関連性に関する研究 -スキップ・タッチに着目して- 茨城大学教育学部紀要, 教育学 63 205-218
- 高橋弥生他 2010 新・保育内容シリーズ1健康 -藝社 90
- 中央教育審議会 2016 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申) 中教審第196号
- モンタギュー 1977 タッチング -親と子のふれあい- 平凡社
- 文部科学省 2017 学習指導要領解説(保健体育)